

シカの採食で林床が裸地化したブナ林



全国森林 ボランティア 探訪 Vol.30

たんざわおおやま 丹沢大山自然再生委員会

ブナの立ち枯れやシカの食害、表土流出など、森林被害が著しい丹沢で、官民協働で森林の再生を目指す展開が進められています。

県、国、市町村、関連団体、企業、マスコミ、NPO、研究機関などで組織される「丹沢大山自然再生委員会」は、

各組織の保全活動を体系的に支援するとともに、県等が行う保全施策を科学的に評価し、政策面に反映する取組を展開しています。

官民参加のボランティア協働組織

大都市の近郊にあって、ハイキングや沢登りなどで多くの人びとに親しまれている神奈川県「丹沢」は、ブナの立ち枯れやシカの採食、登山者による踏み固めなど、森林被害が進んでいます。

「信仰の山」大山を含む丹沢山塊では、四、九〇〇畝という広大な森林が危機に直面していることを憂える人びとが、民と官の枠を超えて丹沢の森林を再生しようと、市民参加の協働組織として平成一八年に立ち上がったのが、「丹沢大山自然再生委員

会（委員長・木平勇吉氏）」です。丹沢で活躍している森林ボランティアは数多くありますが、行政・研究機関・民間が一体となって活動しているのがこの委員会で、全国的に見ても貴重な存在といえるでしょう。

この委員会の前身は、平成一六年に神奈川県で設立された「丹沢大山総合調査団」で、学会と行政、市民を交えて構成され、三年間かけて丹沢の森林被害の状況を調査し、自然再生の基本方向と新たな仕組みを示した政策提言を行いました。その総合調査団を発展させて「丹沢大山自然再生委員会」がスタートしました。委員会は、この提言を受けて、



シカ食害防止ネット



地面の植生がなくなった森ではシカは樹の皮で飢えをしのぐ(写真提供: 丹沢大山自然再生委員会)

県が作成した「丹沢大山自然再生基本構想」と「丹沢大山自然再生計画」に沿って活動しています。活動は多岐にわたり、荒れた登山道の整備や、樹木をシカの被害から守る活動をはじめ、各種の調査活動を通じて、県が実施している森林保全事業に参加するなど、行政との協働で自主的に活動する「自然再生の神奈川モデル」



県の担当者から説明を聞くボランティア

としてさらなる発展を目指しています。

シカの採食被害の状況

ブナ、コナラ、クヌギなど天然広葉樹林の地面は草や低木はほとんど見られません。シカが食べないマツカゼソウ、フタリスズカ、テンニンソウ以外はほとんど食べ尽くされ、表土の流亡を防ぐ役目を果たす落ち葉も土と一緒に雨で流され、土壌の侵食が進み、木の根が浮き上がるなど、森林の劣化が進んでいます。侵食がさらに進むと、水害など自然災害の原因になりますので、神奈川県では



土壌侵食で根が浮き上がったブナ林

ボランティアとの協働で表面の土の流出を防ぐために、いろいろな研究と工夫を行っています。一定の面積にネットを張ってシカの進入を防ぎ、ネットの中と外で草や低木の生育を調べています。ネットの中では草や低木が育っていますが、外はシカの採食で土がむき出しになっています。また、落ち葉をためて侵食を防ぐために一定の間隔で、「金網筋工」という三角形の柵を設けています。この金網に落ち葉がたまり、土壌侵食をくい止める効果が高まっています。

ブナ林の再生を目指して

蛭ヶ岳（ひるがだけ）（一、六〇〇メートル）と丹沢山（一、五〇〇メートル）の頂上付近のブナは立ち

枯れが目立っています。神奈川県調査によると、ブナが枯れる原因は、オゾン濃度、ブナハバチとシカの採食、土壌の水分不足による水分ストレスの複合が考えられるとしています。ブナの生育に必要なオゾン濃度は四〇ppb以下とされていますが、丹沢山頂で観測したところ、常に四〇ppbを上回っていることが確認されています。

ブナ林を再生する実験が行われています。ブナの実を採取して、苗木を育て保護柵で囲った中で育てています。柵の中は雑草が生え、ブナの生長を助ける働きをしているので、順調に生育しています。

ブナ林の再生は、丹沢の山を元気にするだけではなく、希少な動植物



柵内で行われている植生の復旧試験



稜線部分のブナは枯れて白骨化している（写真提供：丹沢大山自然再生委員会）

の保全や地域の安全と活性化など人と自然の結びつきを強めるといふ大きな働きを導き出すことにもなります。

丹沢大山自然再生委員会

2004年丹沢大山総合調査団設立
2006年丹沢大山自然再生委員会設立
委員長：木平勇吉
委員会の構成：大学・民間研究機関・NPO法人・マスコミ関係、企業・団体、行政機関等
事務局：神奈川県緑政課長、神奈川県自然環境保全センター所長